

「AI 時代における持続性ある社会保障モデル: 診断・治療から予防・健康増進へ」

### 開催趣旨

急速な高齢化の進行、医療・介護費の増大、慢性疾患の増加といった構造課題を抱える中、従来の「病気になってから診断し、治療する」ことを中心とした社会保障モデルは、財政的・人的資源の両面から持続可能性が問われている。従来のように、社会保障費の漸増傾向に対して医療費・薬剤費の抑制のみを主たる手段とするアプローチでは、これらの構造課題を十分に解決できないだけでなく、日本の医療の質の低下を招くというパラドックスに陥る可能性がある。

一方、データサイエンスや AI の進展により、医療・健康分野では予測、個別化、最適化といった新たなアプローチが現実のものとなりつつある。また、これまで法的・技術的制約により活用が限定されてきた PHR(Personal Health Record)をはじめとする多様なヘルスケアデータの利活用にも道が開かれつつある。こうした科学技術の進展と質の高いデータの活用を、社会保障制度の設計思想そのものにどのように組み込むかが、今後の重要な論点となる。

診断・治療中心の時代から、予防・健康管理を軸とする社会保障への転換、そしてそれを可能にするデータや AI 技術の活用は、財政的持続可能性の確保にとどまらず、国民一人ひとりの健康価値を最大化する観点からも検討されるべき課題である。今後は、技術、制度、倫理、財政を横断した議論を、官民が連携して積極的に進めていくことが求められる。

本シンポジウムでは、「医療データの活用による予測型医療の実現可能性」、「個別化医療・精密医療と制度設計の整合性」、「予防・健康増進へのインセンティブ設計」、「成果連動型・アウトカム志向型の社会保障への転換」、「AI 活用に伴う倫理・ガバナンスの課題」等について議論を深める。これにより、上記の官民による議論を促進し、持続可能で包摂的な社会保障モデルの具体化に資する契機となることを期待する。

パネルディスカッション座長  
北里大学大学院薬学研究科教授  
医療科学研究所理事  
成川 衛